

## 山梨県身延の精神病患者

橋本 明

The Mentally Ill in Minobu, Yamanashi

Akira HASHIMOTO

キーワード：精神医療史，身延，長谷川寛善，日蓮宗，仏教社会福祉

History of psychiatry, Minobu, Hasegawa Kanzen, The Nichiren sect, Buddhist social welfare

従来の日本の精神医療史における主人公は、近代西欧医学の受容と普及の独占的な舞台—帝国大学—で活躍するその教師、学生、卒業生であった。西欧に留学した最初の教師のもとで学んだ複数の学生は、いずれ教師となって日本各地に散り、彼らはその地で学生を教えることになる。こうして帝国大学を媒介とした師弟ネットワークはこの国の隅々にまで張られることになる<sup>1)</sup>。その結果、精神医療史は西欧学問の伝達者たる医学者の業績を顕彰し、彼らが深く関与した国家的な制度の形成と発展、すなわち「中央から地方に流れていく一方向の情報伝達」の系譜を描くことになる。筆者はこうした「中央から地方への歴史」に偏向した記述に批判的な立場から、精神医療の歴史をローカルな視点から捉えなおすことの必要性を強調し、日本各地の図書館・文書館を訪ね、地元の歴史を知る関係者への聞き取り調査を重ねてきた<sup>2)</sup>。

本論文で取りあげた身延は、山梨県の精神医療史に関わる調査の一環として平成20(2008)年8月に訪ねた地である。身延と精神病治療との関わりはこれまでの文献でも示唆されてはいるが、その検討はいまだ不十分である。また、日本各地の滝場や温泉といった伝統的な精神療法の「治療の場所」は第二次世界大戦後に廃れ、ほとんど痕跡を残していないことが多いなかで、巡礼地としての機能を今も保ち続けている身延の歴史には特記すべき

ものがある。以下では、身延と精神病患者との関わりを歴史を明らかにすると同時に、身延を通して日本の精神医療の歴史を再検討していきたい。

### I 身延というマイクロコスモス

山梨県の身延(山梨県南巨摩郡身延町)はほぼ富士川に並行して走るJR身延線沿線にあり、甲府と富士とのほぼ中間地点に位置している。身延山(1153m)の山裾に広がるこの町は、日蓮宗の総本山として知られる久遠寺を中心にした場所である。今でも全国からの身延詣での参詣客が集まる巡礼地であると同時に、久遠寺の三門近くに旅館やみやげ物屋も多く立ち並ぶ観光地でもある。

最初に、身延詣でをするつもりで、身延とその周辺地域を宗教・歴史・地理学的に紹介したいと思う。

身延詣での玄関口はJR身延駅である。そもそも、静岡県の富士と身延とが鉄道(当時は富士身延鉄道)で結ばれたのは、大正9(1920)年のことだった。現在の駅舎から久遠寺方面に向かう場合、まずは駅前の商店街を抜けて富士川に架かる身延橋を渡ることになる。この橋の完成は身延—富士間の鉄道が開通した後の大正12(1923)年のことで、それ以前は船を利用して富士川を渡っていた。一方、身延—甲府間の鉄道が開通したのは、

昭和3（1928）年になってからである。この結果、富士—身延—甲府をつなぐ路線が東海道線と中央線との双方に接続し、参詣者の便宜はおおいに高められたという。身延橋を渡った先に大正11（1922）年に開通した大野トンネルがある。これによってかつての久遠寺への経路は大幅に短縮された<sup>3)</sup>。トンネルをこえて波木井川を渡り、久遠寺の総門を抜け、門前町を進むとやがて巨大な三門が見えてくる。三門をくぐり杉並木の参道を進み、長い急勾配の石段を登りきると、本堂や祖師堂などの建物が配置された平らな広い境内に到達する。参詣者はここからさらに上をめざし、奥の院思親閣を参拝する。かつては身延山を歩いて山頂付近の奥の院をめざしたが、現在はロープウェイを使って楽に山頂に行くことができる。身延山を参詣する信者のうち、久遠寺の周辺に数多く点在する宿坊などに宿泊する者も多いという<sup>4)</sup>。

身延山の西方に聳え立つのが七面山（1982 m）である。もともとこの山は山岳信仰の聖地であったが、日蓮宗の広がりとともに身延山久遠寺の勢力下に置かれることになった。山頂付近には久遠寺に属する敬慎院がある。参詣者の中には身延山を経由して、七面山をめざす者も少なくない。身延山の険しい山道を数時間歩くと、山の中腹にある赤沢の集落に到達する。赤沢は身延山から七面山までのほぼ中間地点にある宿場で、参詣者が休憩する場所として栄えた。明治初年には9軒の宿屋があり、赤沢全体で1日当たり400余人の宿泊者収容能力があった。その後も七面山への参詣者が増え続け、明治末年から大正までには、旅館は相次いで総2階建てに改装するなどして、旅客の増加に応えたという<sup>5)</sup>。だが、戦後になると七面山登山に便利な車道が整備され、徒歩による参詣者を多く泊めていた赤沢宿は衰退し始めた<sup>6)</sup>。平成5（1993）年には、この集落の歴史的・文化的価値が認められ、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されたが<sup>7)</sup>、現在宿屋として営業しているのは江戸屋旅館1軒のみである（図1）<sup>8)</sup>。

赤沢宿から七面山に向かうには、山を下って春木川を渡ることになる。春木川に架かる羽衣橋のたもとにある崖の上からは白糸の滝（雌滝）が、すこし上流にある弁天堂の裏手の崖からは弁天の滝（雄滝）が流れおちている。参詣者は滝場で身を清め、羽衣橋を渡り、七面山の頂上をめざして対岸の登山口から再び険しい山道を登



図1 赤沢宿の江戸屋旅館（昭和30年代頃）  
（写真提供：望月絹さん）

る。登頂を果たした参詣者は、来た道を逆にたどって帰っていくのだという。

以上のような身延詣でがいつ頃に形成されたのかは定かではないが、江戸時代中期に広がった全国的な寺社参詣の流行が一つの契機となっていると考えられる。この時代に江戸や大坂には数多くの身延講（身延を信仰する団体）が作られ、集団で身延を訪れた。身延詣では都市部だけではなく、農村部へもかなりの広がりを見せていたという<sup>9)</sup>。こうして、身延という地域は各地から訪れる多数の参詣者を迎え入れるための宿屋、宿坊や商店などがひしめく町として発展し、現在も数多くの宗教関連施設と、宗教法人を母体にした教育機関、病院、福祉施設が集積している。

## II 精神病者が集う身延

参詣者でにぎわう身延は、一方でいわゆる乞食や身寄りのない貧困者、病人の一大集合地でもあった。地元の人話によれば、「身延に行けばなんとかなる」という思いから、無一文の状態でも、身延に来た人も少なくなかったという<sup>10)</sup>。

それを裏づけるものとして、昭和9（1934）年の『峡中日報』に掲載された「乞食大会」の記事をあげることができよう。それによると、久遠寺の総門から七面山にかけて200人あまりの乞食が住み、参詣者から恵まれる金で暮らしているという。しかし、2、3年来の不況で参詣者からの金も減り、このままでは冬が越せないという、乞食たちが結集して、大会を開いたというものである<sup>11)</sup>。

また、久遠寺周辺は、身寄りのないハンセン病患者が多く集まっていたことでも知られる。久遠寺には古くからハンセン病患者のための参籠所が設けられていた。しかし、明治35(1902)年、不衛生であることなどを理由にこの施設は警察署によって焼棄されたという。悲惨をきわめたこれらの患者の世話を始めたのが仏教者の綱脇龍妙である。綱脇は明治39(1906)年に、身延川をはさんで久遠寺の対岸にハンセン病患者の療養所・身延深敬病院を設立した。身延深敬病院は、昭和5(1930)年には九州に分院も開設している。昭和18(1943)年に身延深敬園と改称され、戦後もハンセン病の療養所として継続していたが、利用者の減少にともない平成4(1992)年には閉園し、現在はその場所に身体障害者療護施設「かじか寮」が建っている<sup>12)</sup>。

身延にはハンセン病患者だけではなく、本論文の主題である精神病患者も数多く集まっていたと考えられる。たとえば、東京帝国大学の呉秀三による大正元(1912)年の論文には、次のような記述がある。

身延山久遠寺(山梨県南巨摩郡身延村)は有名なる日蓮宗の本山にして、往時より諸病者の参詣祈禱を請うもの少なからず。其中には精神病患者も加わりたり。今も毎月五、六人の精神病患者来たり詣づるも、何れも数日若くは十数日間滞在するのみ<sup>13)</sup>。(原文は漢字カタカナ文、必要に応じて句読点を加えた。)

おそらく呉自身が身延を訪れたのではない。この記述の情報源は呉秀三の下で助手をしていた斎藤玉男からの伝聞であると推察される。斎藤は明治44(1911)年に山梨県の精神病患者の私宅監置調査を行った際に、身延まで足をのばしている<sup>14)</sup>。当時から身延の精神病患者については、広く知られていたのだろう。彼は身延訪問を回想して「身延へまいりましたら、なんか、大学から役人が来る。で、病人などを預っているとうるさいと云うので、私の行つた日には病人は皆どつかへ逃げ出してしまつて……(笑)」と述べていることから、久遠寺周辺の精神病患者の具体的な状況は把握できなかったようである<sup>15)</sup>。「預っている」とは、久遠寺のどこかの場所に精神病患者が参籠していたのだろうか。それとも、参道付近にホームレス状態で参集している精神病患者を寺が黙認している

状態を指しているのだろうか。それを裏づける資料がないので判然としない。

いずれにせよ医学関係の文献から拾うことができる、身延の精神病患者に関する記述はこの程度にとどまっている。ただし、昭和12(1937)年の菅修の論文「本邦ニ於ケル精神病患者並ビニ之ニ近接セル精神異常者ニ関スル調査」には、精神病患者保養所として「身延山功德会」の名前が記されている<sup>16)</sup>。そこで、この「会」を手がかりに、身延の精神病患者についてさらに検討してみたい。

身延山功德会とは、明治39(1906)年に設立された生活困窮者のための宿泊施設である。設立者の長谷川寛善(1877-1934)は新潟県に生まれ、立身出世を志して上京したが、苦勞がたたって眼を患う。片目を失い、もう一方の目も弱り、失意のどん底に落とされた。自殺まで考えたという寛善は、知人より眼病守護の靈験あらたかな「身延山の日朝様」のことを聞いて身延を訪れた<sup>17)</sup>。「日朝様」とは、身延山第11代法主の日朝上人(在位1462-1499年)が開いた行学院覚林坊のことである。日朝は61歳で失明したものの、信仰の力でこれを克服したという由来から、覚林坊は「目の神様」として知られるようになったという<sup>18)</sup>。時の覚林坊住職・日温との出会によって、寛善は仏門に入ることを決意する。明治38(1905)年には、日温より許されて、寛善は覚林坊の隣地にある無住の荒れ果てていた大善坊の留守居番となった(後に大善坊の住職になっている)<sup>19)</sup>。

明治39(1906)年正月、久遠寺本堂の下で死亡していた老婆を発見して心を痛めた寛善は<sup>20)</sup>、大善坊の敷地に身延山功德会を創設し、無宿者の収容保護事業を始める。当初の建物は応急的な丸太造りの収容室といったもので、わずか数名を収容できるのみであった<sup>21)</sup>。彼はこの事業の動機について次のように語っている。

当山に参詣する諸国の信徒中には随分不幸な人もあつて、難病の平癒を祈願する為に、香典にも等しい餞別を貰つて故郷に別れて来る者、又は参詣の途中旅費を費い果して居る者、病苦その他種々の事情から困窮に陥り、参詣後、御堂の下や樹下石上に宿る人が少なくなつたので『一夜の安らかな宿なりとも』と言う願意から、微力を顧る暇なく、功德会

を創立した次第です<sup>22)</sup>。

だが、財政的な裏づけがあって開始したわけではなかった。事業運営費の捻出は最初から困難をきわめた。功德会への評価も低かった。寛善は地元では「乞食の親方」、寛善の子も「乞食の親方の子」と呼ばれていたという。しかし、大正9（1920）年には身延山功德会に対して山梨県から補助金が下付されるなど、その活動は社会事業として徐々に評価され始めた。昭和3（1928）年には、身延深敬病院の綱脇龍妙とともに、長谷川寛善は内務省より社会事業功労者として表彰されている（図2）<sup>23)</sup>。

さて、大正15（1926）年11月の日蓮宗宗務院の『日蓮宗宗報』で紹介されたという身延山功德会の「身延功德会規定」<sup>24)</sup>第2条によれば、「本会は本宗信徒若くは行路病者等偶々当山に来るも旅費欠乏して宿泊に困難するものを収容し無料宿泊せしむ」（原文は漢字カタカナ文）とある。さらに無料宿泊は普通3泊以内（ただし旅行中の疲労や病人は除く。同第4条）で、また有料で一般の信徒の宿泊も認めていた（同第5条）ことから、入れ替わり立ち替わり短期間に多くの宿泊者が利用していたと考えられる。昭和12（1937）年度の事業報告によれば、創立以来の宿泊者の延べ人数は221,380人、1年間で平均



（長谷川寛善上人）

図2 長谷川寛善  
（写真提供：長谷川美子さん）

11,437人、1日平均32人となっている。昭和12年度については、「行路病人並病人救護」が36人、「精神病者収容」が16人などと記録されている<sup>25)</sup>。先に述べた昭和12（1937）年の菅修の論文には、精神病者保養所としての身延山功德会の収容定員は5人、代表者氏名は長谷川寛亮とある<sup>26)</sup>。寛亮は寛善の長男であり、昭和9（1934）年に他界した父親の事業を引き継いでいる。

その後の規模拡張工事によって、昭和15（1940）年には功德会の収容定員を50人とした（図3）。落成当初の収容人数は28人で、新たに設置された「精神病患者監置室」には6人を収容していたという<sup>27)</sup>。生活困窮者の収容状況や収容後の生活などの詳細は不明であるが、町田是正（身延山大学名誉教授）は戦前の様子を次のように回想している。こうした状況で、精神病者も功德会が置かれた大善坊を訪れたのかもしれない。

戦前まで、身延のお山や街並<sup>まちなみ</sup>を流浪者が乞食してさまよった。時折り、民家の軒先にかどづけして立つことがあった。そのとき、人々はきまって「大善坊へ行きなさい」「功德会を尋ねなさい」と云ったものだ。筆者の少年時代の昭和の十年代になっても、そんな光景を目にしたものです<sup>28)</sup>。

だが、長谷川寛善の捨て身とも言える活動と身延山功德会の展開を、仏教的な慈悲と救済、あるいは単なるヒューマンイズムやボランティアの物語へと収束させてしまえば、社会事業史的な視点を軽視した表面的な理解に終わるだろう。



図3 身延山功德会（昭和15年頃か）  
（写真提供：長谷川美子さん）

吉田久一らは、近代日本における仏教の慈善事業への取り組みを歴史的に記述し、個人的活動の時代から組織化された時代へ、さらに国家管理化の時代へと図式化している。それによると、明治初期の取り組みは、産業資本主義社会という現実と社会問題への認識の欠如、すなわち「社会性」を欠いた単なる個人的施与であった。だが、20世紀はじめ頃には慈善事業としての組織化も始まり、さらに日露戦争後の日本帝国主義の形成期には宗教的慈善事業も国家機構の一翼を担う時代へと入っていったのだという<sup>29)</sup>。

この図式に沿っていえば、日露戦争終結直後の明治39(1906)年に開始された身延の二大事業—長谷川寛善の身延山功德会と綱脇龍妙の身延深敬病院—を、仏教者の個人的施与にのみ還元するのは一面的である。むしろ、これらは組織的な慈善事業の背景をもつもので、身延という一地域をこえた全国的な社会事業展開の文脈で捉えるのが自然だろう。

たとえば身延深敬病院に関しては、従来仏教によるハンセン病患者救済の嚆矢とされ、綱脇龍妙がその開拓者と位置づけられてきた<sup>30)</sup>。しかし近年の研究は、日蓮宗僧侶・田中智学の明治24(1891)年に始まるハンセン病救済事業の組織化の影響下に、綱脇龍妙の事業があったことを示唆している<sup>31)</sup>。その後の身延深敬病院については、昭和5(1930)年の九州分院開設の背景に内務大臣からのハンセン病患者受け入れ要請があったこと、患者への断種手術が行われていたことなどから、綱脇が国の患者隔離政策を補完し、優生思想にもとづく国の絶滅政策へ追従していたとの批判も行われている<sup>32)</sup>。

一方、長谷川寛善が身延山功德会を興した当時には、確かにこれを支援する強力な組織は見当たらない。しかし、既に述べた山梨県からの補助金下付や内務省からの表彰など、功德会が社会的に認知・評価され、その存続の契機を与えられたことが同時に、社会事業という公の秩序の中に絡みとられることを意味していただろう。

そのような秩序を反映するように、昭和16(1941)年11月に功德会の事業に関する内規が定められ、「精神病患者保護の場合は付添人が必要、別に規定書申込み次第送付す。大体一ヶ月実費にて十五円位(病勢に依り標準なし)」となった<sup>33)</sup>。設立当初の生活困窮者保護の理念からはかけ離れていると言わざるを得ない、この内規が作ら

れた経緯は不明である。慈善事業・社会事業の文脈とは別の、精神病患者監護の観点から行政による指導があった可能性もある。いずれにしても、もしこの内規が厳格に守られていたとすれば、精神病患者の負担は決して小さくならなかったと考えられ、その収容は相当制限されることになったのではなかろうか。

戦後の昭和26(1951)年、身延山功德会は財団法人となり、翌年には社会福祉法人の認可を受けて、委託養老施設となった<sup>34)</sup>。昭和38(1963)年には、養護老人ホーム身延山功德会となり、さらに昭和48(1973)年には大善坊の敷地内から身延町梅平に移転新築された<sup>35)</sup>。平成4(1992)年、身延山功德会は、久遠寺を設置主体として昭和55(1980)年に設立された身延山福祉会に吸収合併され、養護老人ホーム功德会として今日に至っている<sup>36)</sup>。

以上、身延という場所を概観してわかるのは、日蓮宗の総本山を中心に発展してきたという町の性格から、さまざまな人々の流入・交流の長い歴史があるということである。参詣目的にとどまらず、文字通り「駆け込み寺」として機能してきた久遠寺とその周辺の宿坊は、20世紀に入って無宿者を対象に開始された長谷川寛善や綱脇龍妙による活動へと展開した。彼らの活動は仏教的な慈悲と救済を前提にしていたらうし、こうした彼らの内面的価値こそが評価されるべきものかもしれない。だが、その活動が徐々に社会事業として読み替えられ、おそらく彼らの意図をこえて、社会政策的なプログラムに組み入れられていくことが、本来の仏教者としての内面的価値との間で緊張関係を生み出すという矛盾をはらんでいたのではなかろうか<sup>37)</sup>。

### Ⅲ 藤袋の滝

ところで身延と同様に、宗教(あるいは民間信仰)と精神病患者処遇とが深く関わっていたのが、神社仏閣や滝場、温泉といった伝統的な「治療の場所」である。かつてはこのような場所が日本各地に存在していた<sup>38)</sup>。だが、「治療の場所」の成立段階では宗教的な奇跡や伝説を必要とし、また、そこで行われる治療は宗教的な儀式に分類されるものであったとしても、「治療の場所」を維

持・発展させてきたのは宗教的な原理ではなく、むしろ経済的な原理だったと考えられる。

後者を示す好例として、身延と同じ山梨県内にあった伝統的な精神病の「治療の場所」である、藤岱の滝とその周辺で行われていた精神病治療を紹介したい。昭和15（1940）年の厚生省による『精神病者収容施設調』には「公私立精神病者収容所及び神社寺院瀑布温泉等ノ保養所」のリストがある。山梨県で唯一掲載されているのが向昌院（東八代郡境川村、現在の笛吹市）で、その患者収容定員は10名とある<sup>39)</sup>。曹洞宗の万亀山向昌院（古くは真言宗の長慶寺と称していた<sup>40)</sup>）の域内に藤岱の滝がある。夏には納涼に来る客も多いが、かつては精神病治療の滝として知られていた。患者とその家族は向昌院の本堂や境内に作られた収容所で自炊しながら滞在していた。また、近所の宿屋にも患者と家族が泊まっていたという<sup>41)</sup>。筆者が平成20（2008）年8月の現地調査で地元の人に話を聞いたところ、滝治療を求めて近隣・遠方の各地からやってくる客を泊める、「瀧の庵」と「泉屋」という2軒の宿屋があったことが判明した（図4）。いずれも、戦後間もなく廃業したという。このように、藤岱の滝をめぐる、精神病治療と宿泊に関わる小さなビジネスが行われていたことがわかる。

実際のところ、精神病の伝統的な「治療の場所」として今日まで何らかの記録を残しているものの多くは、藤岱の滝と似た形態のビジネスが展開していた。具体的に言えば、「治療の場所」を訪れる患者や家族への食事や宿泊等のサービスを介して、人と金の流れがあったということである。もちろん、「治療の場所」の知名度や都市部



図4 藤岱の滝近くにあった簡易旅館「瀧の庵」  
（写真提供：橘田政照さん）

からの交通アクセスなどに応じて集客力は異なり、精神病者相手のビジネスの経営規模にも違いがあっただろう。ただ、いずれにしても、ここには長谷川寛善が抱えていたような患者に対する慈善救済的な理念と財政的困難との葛藤は基本的には存在しない。経営的に成り立たなければ「精神病者ビジネス」から撤退するまでである。そもそも戦前の制度下—精神病者監護法および精神病院法の二法体制—では、伝統的な「治療の場所」に公的な資金が投入されることはなかった<sup>42)</sup>。その意味で、「藤岱の滝タイプ」の場所で展開していたことは、営利活動と結びついていた、きわめて私的な営みだったのである。

したがって、身延と藤岱の滝は同じ山梨県内にあり、かつ宗教的なものと絡んではいるものの、それぞれの場所で全く異なるコンセプトにもとづいて精神病者の処遇が行われていたのである。

#### IV 精神医療史における「身延的」なものとは「藤岱的」なもの

最後に、山梨県内の二つの場所がもつ対比、いわば慈善事業・社会事業という公的な意図をもっていた「身延的」なものとは、あくまで私的で経済原理に支えられた「藤岱的」なものという枠組みを応用して、日本の精神医療史でしばしば言及される京都・岩倉に関する言説を検討したい。

岩倉が精神病の「治療の場所」として成立した頃（江戸時代後期と考えられる）には、大雲寺での伝統的な治療（瀧滝、霊泉を飲む、加持祈祷など）が人々を引きつけるために大きな役割を果たしたと考えられる。やがて参詣客を相手に寺の門前に宿屋（茶屋）ができた。時代が下ると、治療自体は背後に退き、むしろ宿屋で患者を預かる場所として岩倉は広く知られることになった。岩倉の知名度は藤岱とは比較にならないほど高く、その集客力の強さから宿屋の規模も大きかったが、岩倉の「治療の場所」としての発展はまさに「藤岱的」なものである<sup>43)</sup>。

ところが20世紀に入る頃には、岩倉の宿屋での患者預かりが「藤岱的」なものとは全く違う文脈で、国内外の専門家から注目され始めた。岩倉で行われていることが精神病院とは異なる開放的で進歩的な治療であり、西

欧で評価が高まっていた精神科の「家庭的な看護」に匹敵するというのである。とりわけ、精神病者の里親制度で国際的に高く評価されていた、ベルギーの小都市ゲール (Gheel) と岩倉との類似性が喧伝された。明治 39 (1906) 年に岩倉を訪れたラトヴィア (当時はロシア領) の精神科医スティーダ (Wilhelm Stieda) が、彼の日本訪問記に記した「日本のゲール (Japanisches Gheel)」という言葉は、岩倉を賞賛するものとして日本の精神医療史に刻印されることになった<sup>44)</sup>。

だが、岩倉の患者預かりとゲールの里親制度とは、その運営理念・体制の点で大きく異なっていた。前者は、わが国の伝統的な「治療の場所」の典型とも言うべきもので、患者相手の宿屋商売という私的な経済原理を基本にして運営されていた。したがって、第二次世界大戦による経済的困難によって、岩倉の宿屋がことごとく経営破綻したのは当然の帰結であった。一方、中世の精神病者の巡礼地から出発したゲールは、カトリック教会に付設された病人部屋および近隣民家での患者預かりの長い歴史をもっている。近代以降になると、フランドル地方の都市部から、多数の身寄りのない貧困精神病者が公費でゲールの里親のもとに預けられ始めた。19 世紀の半ば以降は、街全体が国立の精神病患者コロニーと位置づけられ、里親での患者看護に公的な資金が投入されている<sup>45)</sup>。

ゲールと比べて患者数も格段に少なく、公的資金が投入されることもほとんどなかったが、身延は宗教的な組織を背景にして慈善事業・社会事業的な意図から貧困患者を援助する場所であった。だとすれば、ゲールと比較できるのは、岩倉ではなくむしろ身延ではなかろうか。従来の精神医療史では、「身延的」なゲールと「藤岱的」な岩倉の運営理念上の本質的な違いに目を向けず、里親や宿屋での「家庭的な看護」という双方の「表現型 (phenotype)」の類似にのみ着目してきたのではなかろうか。他方、慈善事業・社会事業といった宗教的かつ公的な性質に着目すれば、身延とゲールの「遺伝型 (genotype)」はよく似ているのである。

以上の比較は、山梨県での現地調査を経てたどりついた一つの試論に過ぎない。今後も精神病の「治療の場所」をめぐる実証的かつ理論的な研究を推し進め、わが国の精神医療の歴史記述を再検討していきたい。

## 付 記

本論の概要は平成 20 (2008) 年 10 月の第 12 回精神医学史学会 (於：愛知医科大学) において口頭発表した。

## 注

- 1) 榊 俣<sup>さかき はじめ</sup>は明治 15 (1882) 年から 4 年間のドイツ留学を命ぜられ、ベルリン大学などで精神病学を修めた。彼は明治 19 (1886) 年から帝国大学医科大学 (現在の東京大学医学部) で日本人教授として最初に精神病学の講義を開始した。榊のもとで学んだ学生の中に、呉秀三 (後に東京帝国大学教授)、島邨俊一 (後に京都府医学校 [現・京都府立医科大学] 教諭)、荒木蒼太郎 (後に岡山医学専門学校 [現・岡山大学医学部] 教授) などがいる。詳しくは、岡田靖雄：日本における精神医学の一〇〇年。こころの科学、86：87-91 (1999)。
- 2) 橋本明：わが国の精神科領域における「患者・家族・地域の歴史」研究序説—精神病患者監護法下における監置患者の暮らしと地域社会—。精神医学史研究、11：115-126 (2007)。
- 3) 続身延山史、174-177、身延山久遠寺、身延 (1973)。
- 4) 菊池東太、中尾堯：日蓮と身延・七面山 (日本の聖域 第 3 巻)、107-108、佼成出版社、東京 (1981)。
- 5) 村上詔一、亀井伸雄、荻谷勇雅ほか編：日本の町並み調査報告集大成第 5 巻 中部地方の町並み (2)、67-69、東洋書林、東京 (2004)。
- 6) 同書、40。
- 7) 同書、10。
- 8) 平成 20 (2008) 年 8 月時点の筆者の赤沢地区における現地調査にもとづく。
- 9) 菊池東太、中尾堯：前掲書、132-136。
- 10) 平成 20 (2008) 年 8 月に行った大善坊 (身延の東谷にある宿坊の一つ) の長谷川美子さんからの聞き取りによる。
- 11) 身延山の乞食大会—三百余名冬籠りの決議—。峡中日報 (第 16226 号、1934 年 10 月 13 日)。記事の見出しは「三百余名」とあるが、記事の中では 200 人あまりの乞食が身延周辺に住んでいると書かれている。
- 12) 中西直樹：仏教と医療・福祉の近代史、190-192、法蔵館、京都 (2004)。
- 13) 呉秀三：我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設、125、東京医学会事務所、東京 (1912)。
- 14) 斎藤の山梨県における私宅監置調査は、明治 44 (1911) 年 10 月 19 日付けで「山梨県管下精神病患者私宅監置状況視察報告」として東京帝国大学総長濱尾新あてに提出された。
- 15) 八十八年をかえりみて—斎藤玉男先生回顧談—、27、大和病院、神奈川県大和市 (1973)。
- 16) 菅修：本邦ニ於ケル精神病患者並ビニ之ニ近接セル精神異常者ニ関スル調査。精神神経学雑誌、41：793-884 (1937)。
- 17) 桑名貫正：身延山における社会福祉の先覚者—長谷川寛善師と綱脇龍妙師—。(身延山大学東洋文化研究所編) 知恩報恩—身延山学園四五〇年誌—、155、身延山大学、身延 (2007)。
- 18) 覚林坊の配付パンフレット「身延山東谷 日朝上人霊跡 覚林坊」(年代不詳)。
- 19) 桑名貫正：前掲論文 (2007)、155。
- 20) 平成 20 (2008) 年 8 月 2 日に身延町総合文化会館で行われた

“身延山大学身延公開講座「身延山と文化Ⅲ」第五回『長谷川寛善上人と身延山功德会』”で講演した桑名貫正によれば、老婆が発見された場所は久遠寺の本堂の下ではなく、三門近くの参道の大杉根元と記述されている文献も多いという。

- 21) 町田是正：身延山秘史・外史（二）福祉施設・「功德会」草創史話。みのぶ（身延山久遠寺の月刊誌），1974年2月号。
- 22) 参籠困窮者を救護する一功德会の事業と寛善師の努力一。身延教報，16(17)：7（1924年9月3日）。
- 23) 桑名貫正：前掲論文（2007），155-158。
- 24) 身延功德会規定。月刊宗報，第119号附録（1926年11月10日）[“身延山大学身延公開講座「身延山と文化Ⅲ」第五回『長谷川寛善上人と身延山功德会』身延山大学特任教授 桑名貫正”配付資料より]
- 25) 身延山功德会昭和拾貳年度事業報告。[上記の身延山大学，身延公開講座配付資料より]
- 26) 菅修の論文では，身延山功德会の代表者氏名として長谷川憲亮とあるが，長谷川寛亮の誤りである。
- 27) 身延山功德会規模拡張工事落成。身延教報，33(9)：20（1940年9月3日）。
- 28) 町田是正：前掲論文。
- 29) 吉田久一，長谷川匡俊：日本仏教福祉思想史。147-195，法蔵館，京都（2001）。
- 30) 同書，191。
- 31) 桑名貫正：近代の日蓮宗におけるハンセン病救療事業の動向について—田中智学と綱脇龍妙を中心に—。東洋文化研究所報（身延山大学東洋文化研究所），6：27-62（2002）。
- 32) ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書。416-418，財団法人日弁連法務研究財団，東京（2005）。ただし，この最終報告書にある身延深敬病院の内容について，不十分な調査にもとづく記述であるとの批判もなされている。桑名貫正：前掲論文（2007），163-164。
- 33) 桑名貫正：前掲論文（2007），161。
- 34) 昭和25（1950）年に制定された精神衛生法（第48条）では精神障害者の収容を原則として精神病院に限定していたため，そもそも功德会が精神病患者を預かることはできなくなっていたと考えられる。
- 35) （前掲）続身延山史，152-153。
- 36) 日本仏教社会福祉学会編：仏教社会福祉辞典。297，法蔵館，京都（2006）。
- 37) 吉田久一，長谷川匡俊：前掲書，3-4。
- 38) 精神病の伝統的な「治療の場所」は，呉秀三の前掲論文（1912）および呉秀三，樫田五郎：精神病患者私宅監置ノ実況及び其統計的觀察。内務省衛生局，東京（1918）。[復刻版，精神医学神経学古典刊行会，1973]を参照。
- 39) 昭和十五年一月一日現在精神病患者収容施設調。厚生省，東京（1940）。
- 40) 山梨教育会編：東八代郡誌。790，山梨教育会東八代支会（1914）。
- 41) 松野正弘：日本精神医学風土記 山梨県。臨床精神医学，27：1293-1300（1998）。
- 42) 精神病患者の医療や保護に公的な資金が投入されるのは，ホームレス状態の患者あるいは生活困窮家庭の患者について，①精神病患者監護法では，市町村長が監護義務者となって患者を精神病院あるいは公的な精神病患者監置室・収容所（医療をともなわない収容施設）に公費で監置させる場合，②精神病院法では，公立精神病院あるいは代用精神病院に患者を公費で入院させる場合，にほぼ限定されていた。ただし，精神病患者監護法・精神病院法とは別に，昭和7（1932）年に施行された救護法によって公的な精神病患者監置室・収容所に公費で収容される精神病患者もいた。さらに，京都・岩倉の民間が経営する精神病患者保養所では，救護法による患者を受け入れていた例もある。
- 43) 岩倉における精神病の患者預かりに関する文献は多いが，もっとも詳細なものとして，中村治，青山純：癒しの里・洛北岩倉。岩倉の歴史と文化を学ぶ会，京都（2000）があげられる。
- 44) 橋本明：岩倉は「日本のゲールか」—精神科家庭看護（Familienpflege）の認識論—。こころと文化，2：28-36（2003）。
- 45) ゲールの里親制度の変遷については，橋本明：Geelの精神医療史—1797年以前の家庭看護の制度について—。精神医学史研究，6：119-130（2002）およびRoosens E, Van de Walle L: Geel Revisited: After centuries of mental rehabilitation. Garant, Antwerpen（2007）などを参照。